

世界の水問題Ⅱ日本の水問題

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

三年 堀内 彩萌

「二十世紀が石油の世紀ならば、二十一世紀は水の世紀」という言葉をテレビから耳にしました。私は水の世紀って何？とよくわかりませんでした。それは世界銀行の副総裁であったイスマル・セラゲルディン氏が、「二十世紀の戦争が石油をめぐって戦われたとすれば二十一世紀は水をめぐる争いになるだろう」と予測した言葉でした。一九七〇年代の石油ショックでは、エネルギーを中東の石油に依存してきた先進工業国の経済は、多大な影響を受けました。二十一世紀になった現在に至っても、原油高によりガソリンなどの値上げ、輸入品やティッシュペーパー、また一部の食品などの価格引き上げにつながるなど私達の生活に影響を広がっています。私達は、普段水がどんなに大切であるかという事は、あまり考えることはないでしょう。それどころか、蛇口をひねれば使いたいだけ水がでできます。そして、その水も無限にあるかのように錯覚しています。それが今私達の生活に大きく影響を与えている石油のように水が扱われるかもしれないのです。

私が住む石川県の南部には、自然豊かな山々に囲まれ、日本に三名山の白山があります。この白山麓の大量の雪解け水は、石川県の水がめとしての役割を果たしてくれています。かつて、金沢では大量のきれいな水を必要とする「友禅流し」が行われていて、加賀友禅が成立・発展した背景には、良質な水に恵まれていたということがあげられています。このように、私はとても恵まれた環境で育ち、それが当たり前のように過ごしてきました。しかし最近私は水について深く考える出来事があったのです。

一年程前、父が仕事の都合で東京に単身赴任が決まり、私は夏休みや春休みに東京に行く機会が増えました。初めて父の住んでいるマンションで冷蔵庫を開けた時、

何本もミネラルウォーターが入っていて、「あー東京ってやっぱり水買ってるんだ」と思いました。最近では、ミネラルウォーターがスーパーなどで売られている光景は珍しくありません。しかし、水を買ったことのない私にとっては少し不思議でもあり、驚きでもありました。そこで私は、さっそく東京の水を飲んでみる事にしました。「ぬるい・・・少し違う気がするけど飲める・・・」感想は、第一に金沢の水はおいしいなと感じました。第二に、東京の水は思っていたより普通でした。どこかまずくて飲めないという先入観があったのです。

世界に目を向けてみると、ヨーロッパ・北アメリカ・日本などはほぼ100%の人が安全な飲み水が得られている一方、途上国を中心にアフリカでは62%、アジアでは81%にすぎないと言われています。何キロも歩いて飲み水とは思えない色の水をバケツにくみ、運んでいる子供をテレビで見たことがあります。以前家族旅行で行ったシンガポールでは、隣のマレーシアから水を輸入していたことに私は驚きました。

まるで安全でおいしい水があつて当たり前のような日本人の考え方は、世界の人から見れば、とても贅沢だと批判が聞こえてきそうです。私達は、このままでいいのでしょうか。

世界の水問題は、一見他人事に感じるかもしれませんが。しかし日本も食糧の自給率を見れば40%と低く、残りは食糧生産に必要な農地と農業用水を海外に頼っている現実があります。世界の水不足は日本にも大きな関わりをもっている以上、世界の水問題に無関心であつてはならないはずで、「水をめぐる争い」などといった悲しい未来にならないように、私達の努力次第できっと地球の未来は変えられるのです。小さな事だけど、節水や汚れた水を流さない、残り湯の再利用など今更以上を意識して行動していきたいと思えます。